

よろずは

平成二五年
四月号

「記紀万葉の故地」シリーズでは、記紀万葉に記された地域にかかわる内容をご紹介します。

記紀万葉の故地 3

記紀万葉の故地のなかで、万葉に限れば、九州については、大宰府のある福岡県を除くと、極端に少なくなります。

少女らが放の髪を 木綿の山 雲なたなびき 家のあたり見む
(訳文) 少女たちがお下げ髪を結ぶ木綿の山に雲よたなびく。家のあたりを見よう。(巻第七の二四四番歌)

今回は、その数少ない歌の中から、豊後国(大分県)に関する旅の歌を紹介します。ここでは、「木綿の山」(現在の由布岳)が詠まれています。これは温泉地として名高い湯布院(由布院)にある山の名です。

歌では、髪を結ぶ意の結うと、繊維の木綿がかけられ、前二句は「木綿の山」の句を導く序詞として置かれています。序詞は、必ずしも歌の意とは関係ありませんが、この場合、放の髪が、振り分けに垂らした状態を言うので、実景を見ると、何となく理解できるような気がします。

旅の歌に詠まれた由布岳は、遠地向かう時の大きな節目として存在したのでしょう。【万葉古代学係】

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。



標高1583メートルの大分県由布市の由布岳(ゆふだけ)
豊後富士とも呼ばれる。